



023
After Century

Art Campus

Photography
Cinema
Fine Arts
Music
Literary Arts
Theatre
Broadcasting
Design



A ACジャパンと言えば、震災後「ポボボボーン♪」というCMを筆頭に民放テレビにその広告があふれたことを記憶している方も多いだろう。かなり広く誤解されていることだが、この団体は政府や公共機関に属する団体ではない。多くの企業やメディア社、そして広告関係の企業団体が会員となって運営している非営利の民間団体である。「企業が少しづつお金を出し合い、世の中のためになるメッセージを、広告という形で発信しよう」という呼びかけのもとに、広告主は出資を、メディア各社はその広告枠を無償で提供し、制作各社は各種広告物の制作力を提供するというかたちで40年間活動してきた。その長い間「公共広告機構」として活動したため、政府や国際機関と間違えられもしたのである。現在はその団体名称を「ACジャパン」とあらため、2011年からは内閣府承認の公益社団法人となつたが、活動の基本や組織はかわらない。現在はさまざまな公共メッセージの発信を通じ明日の社会を考える啓発活動のほか、骨髓バンクや国境なき医師団などの団体を広告活動で支援する取り組みもおこなっている。

だからACジャパンの現場には、日本の広告界で活躍するさまざまなクリエーターが集まつてくる。商品広告とは違って制約の少ない公共広告ではクリエーターの力が存分に發揮でき、試されもする。また日頃から広告活動に熱心なさまざまな企業や広告会社等のスタッフが様々な場面でACジャパンの活動に参加している。そこは広告制作の世界が凝縮されたところでもある。

今年で7回目となる公共広告学生CM賞にも、その審査は広告の第一線の人々が関わってきている。また審査基準もACジャパンの通常の活動時とかわらない。テーマ設定の社会性は確かなものか、それを訴える意味は大きいか、そのテーマをわかりやすくする企画力はどうか、テレビCMを活用する企画足り得ているか、多くの人々を動かし、明日のことを今考えるきっかけになっているか。こうしたことがプロのクリエイティブと同等に評価・審査される。これは学生にとってかなり厳しい広告賞なのである。

ACジャパン「第7回 公共広告CM学生賞 8学科合同チームが準グランプリに

C の賞で今回、見事に準グランプリを獲得したのは、芸術学部のなんと全学科にまたがるチームだ。文芸学科・黒沼千春さん、放送学科・福井裕子さん、演劇学科・福村豪馬君たちが中心的なプランナーとなり、映画学科・厚木拓郎君や園田力意君、演劇学科の青木友理さんらが出演。音楽学科の並木孝博君は音楽を担当し、映画学科の植田倫世さんが衣装を担当、さらに美術学科の赤坂風有子さんも衣装と美術を担当。さらに企画やロケーションスタッフにデザイン学科の坂奈津子さん、映画学科の大杉磨耶さん、音楽学科の坪田麻耶さん、そして映画学科の山下祐太君は映像の編集にと、まさに8学科それぞれの特徴と個性そしてそのコラボレーションによる総合力が発揮されたチームなのである。

その表現もふるつてている。テーマはヘッドホン・ステレオ等の音漏れ。普通なら「迷惑だなあ」という表現になるところを全く逆に「音漏れサイコー」とばかりに周囲の乗客が踊りだすと言う設定。ほんの小さなアイディアなのだが、それを生み出すのは並大抵のことではない。また小さなアイディアを映像という形に定着させてゆくプロセスも実にすばらしいものである。

このチームは元来、学科の枠を超えた専門科目、芸術学部総合講座「広告企画実務」の授業内の課題として公共広告企画に挑んだグループが核となっている。この講座には広告の第一線で活躍するクリエイティブ・ディレクターやアートディレクター、プランナーや広告音楽・広告写真の方々、広告主として広告に携わる方々などを講師に招き、広告企画の現在を生の姿でつかもうとする講座である。その講師陣の充実ぶりや多角性から業界でも注目を浴びている。今回準グランプリに輝いた諸君は、まさにこうした日芸らしい、日芸にしかない授業でアイディアを生み出し、定着させるまでのクリエイティブの様々な考え方を吸収し、さらにはお互いが日頃学科で学ぶことを存分に活かし、これをぶつけ合い、一つの形に結実させてくれたのである。「8つのアート、1つのハート」を具現化してくれたすばらしいチームワークと彼らが磨き上げた彼ら自身の能力には、この講座のマネジメントをしている教員としてもうれしく誇らしい限りである。

この講座は実習として開講している訳ではない。したがって参加する学生諸君に「優秀な企画だから制作してごらん」といつても充分な制作環境を提供できる訳ではない。学生諸君はそれこそ自分たちの力で制作環境をプロデュース、マネジメントするところから始めなくてはならない。今回の準グランプリ作品ももちろん、企画やプランニングだけでなく、制作マネジメントやプロデュースの能力までも問われる状況だったのである。こうしたハンディを負いながらも見事に準グランプリに輝いた彼らの力はまさに賞賛に値する。

こんな彼らの活躍に触発され、多くの諸君が芸術学部の総合力を活かしてさらに活躍してほしい。また私たちもそうした場面をできるだけ数多く学生たちに提供できるよう努力しなくてはと強く思う。

彼らの作品はこの7月より1年間、日本の民間BS放送各社で放映される。ぜひご覧いただきたい。放送学科教授 兼高聖雄



いつもBESTを。

今、この瞬間にBESTを尽くす。
夢をこの手で掴むために。

放送学科 テレビ制作専攻 3年

山本明広さん



■入学後に見つけた、進みたい道

山本明広はディレクター志望である。日芸の学生には“ディレクターになりたい”と明確な意志を持って入学する者もいるが、授業の中で様々な経験を重ねながら志望する道を決める者もいる。山本は後者だった。入学当初は脚本家になりたいという思いもあったが、テレビ制作の実習をするうちにディレクターになりたいという気持ちが強くなってきた。山本が日芸に興味を持ったのは高校3年の夏。何かものを創る事がしたいと思ったのがきっかけだった。今でも覚えているのはオープンキャンパス。放送学科の先生が『プロとアマチュアの違い』について話した。「その中で先生の“プロは自己満足ではいけない。いろいろな人に見てもらって、評価されなければならない”という話がとても印象に残りました」。

日芸を受験した時は、いろいろなことをやってみたかった。映画学科と放送学科を受けたが、将来の方向性が完全には定まっていたため、より多方面の可能性を探りたいと考えて放送学科に進んだ。そんな山本は、なぜディレクターを志すようになったのだろうか。

■準備があつてこそその応用



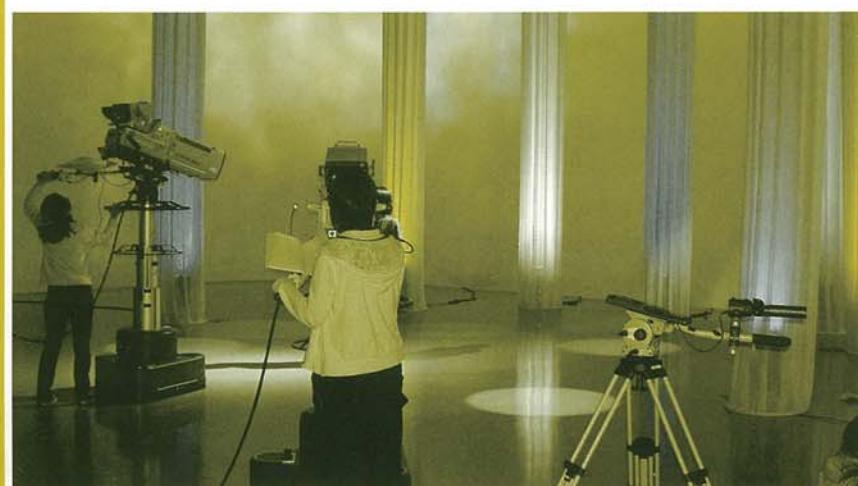
放送学科には実際にテレビ番組を制作する実習があり、これまで山本は何本かのテレビドラマ、音楽番組、ワイドショーの制作に携わった。制作にあたっては演出部、技術部などで各担当が振り分けられるが、山本は2年前期の音楽番組と後期のドラマ、3年の音楽収録の計3回、ディレクターを担当した。「ディレクターは人をまとめながら、全体の段取りや構成を考え、脚本の意図を考えながら作品を創る仕事です。人をまとめるのは大変ですが、自分がイメージしているものが徐々にかたちになっていくところにやりがいを感じます」。

ディレクターと一口に言っても、当然のことながら一人ひとりやり方は異なる。山本は「たとえばドラマならカット割りや衣装、ロケ地、スケジュール、仕事の振り分けに至るまで、準備を入念にするタイプ」と自己分析する。さらに「作品の出来不出来は準備にかかってくると思います。現場でその場その場の応用が利くのも準備を万全にするからこそ」と彼は言う。準備も制作の一つの過程だと考えるやり方である。こうしたやり方を確立できたのは、他のディレクターの仕事を見ながらこれはこうした方がいいなど常に考えていたから。いいところがあれば自分のディレクションに生かし、そこに自分の方法をプラスすることでよりBESTな方法を模索しているのだ。

■今までにない旅番組を

準備をする。それは決して簡単なことではない。準備をするためにはどんな作品を、どのように創りたいかという明確な意志が不可欠である。山本にはそれがある。2年の時に手がけた音楽番組は、演出と技術のバランスをうまくとることができず、満足のいく出来ではなかった。山本はその経験から“全体のバランスを見ながら制作することの大切さ”を学び、ディレクターを務めた3年の音楽収録でそれを実践した。一つひとつの経験をただ単に重ねるだけでなく、彼は経験から着実に何かを学び、それを実践しているのである。

これから準備に取りかかる卒業制作で、山本は旅番組を制作する。旅番組が好きで、自らも旅行が好きな彼は、2年の夏休みにユースホステルの場所などを徹底的に調べ、航空券だけ持つてフランス、ベルギー、ドイツへ。経験から学ぶ術を知っている山本は、旅先で外国人の人たちと触れあった自らの経験を卒業制作の番組創りにどのように生かし、どんな旅番組を作成するのか今から楽しみである。



「経験」から何かを学ぶ。

映画学科 演技コース 2年

まつかわ な る き
松川尚瑠輝さん



■転機となった作品との出会い

芸歴18年。1歳半の時、姉と共に芸能プロダクションに入り、子役として様々な仕事に携わってきた。代表作は天海祐希主演『女王の教室』(日本テレビ)。冷酷無比の女性教師を慕う生徒の一人、明るく振る舞いながらも内面に暗い影を落とす真鍋由介役を見事に演じ、話題を呼んだ。

『女王の教室』は、松川にとって一つの転機といえる作品だった。実は、この作品のオーディションに落ちたら役者を辞めようと思っていたのだ。当時彼は中学2年生。友達も多く、サッカーが大好きだった彼は、学校を休んで仕事に行かなければならぬことが嫌だった。「みんなと同じように毎日遊びたかった。仕事は好きでしたが、親にやらされているという気持ちがどこかにあったんだと思います」。

辞めるか、続けるかの瀬戸際で挑んだオーディションに合格した松川は、その時から変わった。「演じるためにどうすればいいかを自分自身で考えるようになった」と彼は言う。誰にやらされているのではない。自分が好きだから続けたい。松川の役者としての新しいスタートは、ここから始まったのである。

■“日芸に行きたい”という夢をかたちに

松川が日芸への進学を決めたのは、中3にあがる前の春休み。『彩恋』という映画で共演した俳優・細山田隆人に出会ったのがきっかけだった。「細山田さんは撮影現場でいきいきと、楽しそうに仕事をしていました。話を聞いたら日芸に通っていると知り、自分も日芸に行きたいと思うようになりました」。目標を日芸に絞り、夢をかなえるべく日本大学豊山高等学校に進学。その後、映画学科演技コースに進むことになった。

仕事の現場を数多く経験してきた松川の目に、日芸での大学生活はどう映ったのだろうか。「演技には教科書もないし、今までレッスンを受けたこともなかったのでとても新鮮でした。感情表現をする演技の授業では、笑うことが苦手だと初めて知るなど、自分の演技を再確認できたと思います」。

現場だから学べることがある。大学でしか学べないことがある。両軸から学び、経験を積むことによって、自分という幹を太くする。そこから演技に対するより大きな自信が生まれると、彼は信じている。

■俳優として、学生として「今」を楽しむ

幼い頃から所属していた事務所は子供が多いため、高校卒業を機にフリーになった。今後は新しい事務所で活動する予定だが、これまでの実績が認められ、大学に入ってからも様々な作品に出演している。現在はNHKの連続テレビ小説『おひさま』に原口武志役で出演。さらに、以前出演した昼ドラ『明日の光をつかめ』(東海テレビ制作)の第2弾『明日の光をつかめ2』も撮影中である。

「仕事との両立は大変ですが、大学はできる限り来るようになっています」と松川は言う。小中学校時代、学校を休んでつらい思いを経験した分、大学生活を楽しみたいという気持ちが強いのかもしれない。1年の終わりからダンスサークル「alphabet A」に所属し、芸祭での発表に向けて仲間とともに日々練習を重ねている。また、監督コースや撮影録音コース、演技コースの仲間たちが集まり、一つの作品を創りあげる実習作品制作の授業にも意欲満々。「いつか大学の仲間が作品を撮る時に、もしかしたら役者として呼んでもらえるかもしれない。そのためにも今、学校の仲間とのつながりを広げていきたいですね」。

演技では、笑うことが苦手だと言っていたが、実際に会った松川は明るく、笑顔の似合うキャラクターである。微笑、嘲笑、哄笑、苦笑……。笑いには様々な種類があるが、松川は演技ではない心からの笑顔で大学生活を楽しんでいる。

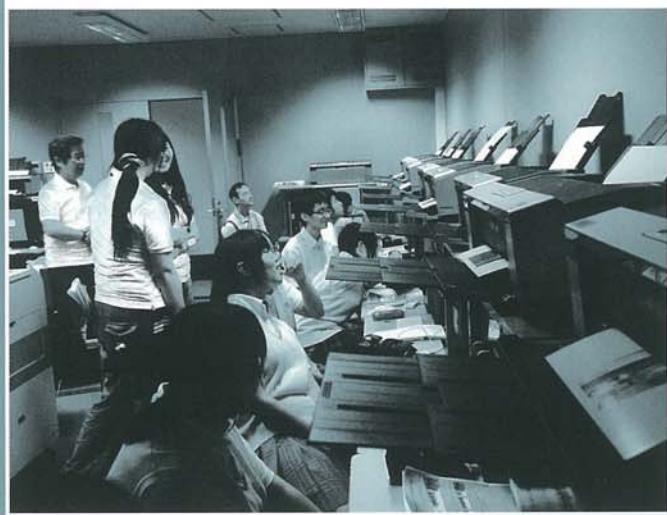


ダンスサークル「alphabet A」ではヒップホップのジャンルに所属。ダンスは初心者の松川だが、人前に出ることは大好き。芸祭で踊る彼の姿に注目あれ!

*現在、撮影中の昼ドラ『明日の光をつかめ2』は、7月4日・13時から放映スタート(フジテレビ系列)。



今 年は模擬授業の内容を厳選し、45分に拡大しました。東京スカイツリーができる前の光景から記録写真のパワーを問いかけるものや、写真学科OBカメラマンによる震災などの報道の現場からの声、といった充実した内容になっています。また、デジタル、スタジオ、暗室などの体験授業もおこない、楽しみながら写真学科を体感していただけます。



映 画学科では、理論評論コース教授、脚本コース教授、映像コース教授による公開講座「映画・映像作品の見方、作り方」(3専攻、理論・批評・シナリオ・映像バトル企画)【古賀太教授・鳥山正晴教授・奥野邦利教授】、映像コース/監督コース/撮影録音コース/演技コースの実習作品の上映、映画学科教員による進学相談コーナー、在学生による学生進学相談コーナー、施設見学の企画を用意しています。授業で使用する撮影スタジオ、録音スタジオ、現像場などを見学していただけます。公開講座、学生が授業内で製作した作品の上映を通じ、映画学科の授業、作品製作を体感してください。進学コーナーでは、映画学科の教員に直接相談ができます。また学生進学相談コーナーでは、学生生活の生の声を聞くことができ、学生からみた映画学科がみえてくると思います。ぜひ、いろいろ質問をしてみてください。

【映画学科専任講師 増田治宏】



柳原義達 獲
1978年頃

海の日はオープン

美 術学科ではワークショップ、進学相談コーナーの他に公開講座を行います。西棟地下では実際に柳原義達の作品を展示、スライドを交えて柳原の彫刻の世界を振り返ります。

□生命の彫刻 柳原義達の歩んだ道 13:00~14:00

「柳原義達(1910-2004)は、カラスやハトの彫刻で親しまれていますが、人が立つことの美しさを追求した彫刻家でした。また芸術学部美術学科の彫刻コースの基礎を築かれた先生でもあります。芸術学部では既に作品を3点所蔵していますが、昨年度亡くなられた柳原操夫人から4点の作品が新たに遺贈されました。生誕100年を過ぎたばかりですが、この機会に柳原彫刻の世界を振り返ってみたいと思います。」



絵画、彫刻とも進学相談コーナーは10:00~16:00まで行われており、あわせてアトリエも公開しています。ワークショップは絵画、版画、彫刻と3つの専攻に分かれて行われます。時間をうまく使えば3つのワークショップを受けることも可能です。朝から夕方までどっぷり美術学科に染まって見てはいかがですか。



私がオープンキャンパスに行ったときは江古田校舎ではなく所沢校舎でした。その時アンサンブルの演奏を聴き、私もオーボエを続けていきたい、室内楽を勉強したいと思いました。又、日芸は音楽だけでなく、映画、演劇、芸能などの方とも交流ができ、勉強ができるということは他の大学ではあまりなく魅力的だったので、受験することを決めました。色々な人から刺激を受け日々練習に励んでいます。

弦・管打楽コース3年 渡邊菜里実



音 楽学科では、専任教員による進学相談コーナーで、入学試験や授業の内容、進路など皆さんの質問に応じます。コンサートとして、「吹奏楽」「室内楽」「作曲コース作品発表会」、公開演習としてドニゼッティ作曲オペラ「愛の妙薬」、公開講座として「ピアノ演奏論」「音楽療法入門」「情報音楽コース『ギャラリー SWITCH』」「音楽と先端テクノロジー」「音楽の先生になるには」、展示として「卒業作品・卒業論文展示」など多彩な企画を用意しています。楽しみながら日芸音楽学科の魅力を体験していただけます。どうぞお立ち寄りください。

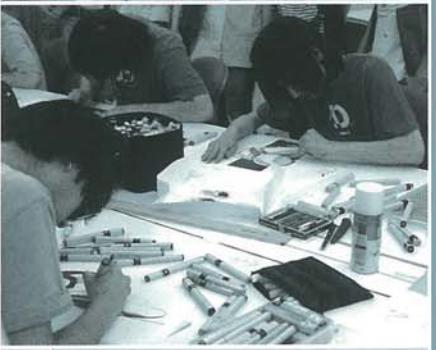
□□ オープンキャンパスに参加したことのある学生のコメントを紹介しますので、見学や進路相談などの参考にしてください。

私は高校3年生の時にオープンキャンパスにきました。オープンキャンパスでは、日芸の先輩たちが大学でどのような生活を送っているかという質問コーナーや先生方による進学相談会、公開レッスンなどがありました。の中でも私は音楽療法の公開講座にとても興味を持ち行きました。そこは二人一組になって「大きな栗の木の下で」を向かい合って歌いました。そのときペアになった人が初対面だったので、最初は緊張しましたが、何回か歌っていくうちにだんだん緊張がほぐれ、音楽でコミュニケーションがとれた気がしました。音楽療法についての知識がなくても気軽に参加できる楽しい講座でした。実際に行われている授業を体験でき、オープンキャンパスに来てよかったです。 音楽教育コース3年 長山望帆



デザイン学科が 変わります!

既存のコミュニケーションデザイン、インダストリアルデザイン、建築デザインの3コースを統合し、来年度4月入学から新体制でスタートするデザイン学科。オープンキャンパスでは、デザイン学科全体説明会、進学相談コーナー、新入試実技試験対策コーナー、今後のデザイン学科の教育内容を模擬授業やワークショップで体験できる「新デザイン学科領域紹介プログラム」などの企画により、新しいデザイン学科の姿をいち早くお伝えします。優秀作品展示、学科映像記録集上映、レンダリング実演、クリティーク（合同審査会）公開など例年の人気企画も目白押し。西棟1階のデザイン学科オープンキャンパス・インフォメーションブースにまずはお越しください！



文芸学科ってどんなことをやっているん

だろう？ そんな疑問にお応えすべく、様々な企画を用意しています。まずは公開講座「書くこと、生きること」「引き算で活かすキャラクター創作術」「編集の実際」、体験講座「パソコンで雑誌を編集してみよう」を開講！ 創作論からパソコンを使っての誌面レイアウトまで、実際の文芸学科生になった気分で授業を体験していただくことができます。もちろんそれだけではありません。文芸ラウンジでは在学生が「文芸研究」や各種実習授業で制作した「ゼミ雑誌」「実習誌」を展示、実際に手にとってご覧いただけます。立ち読みだけでなく、何冊でもお持ち帰り自由！ 入試情報も含めたガイダンスを行う学科説明会や、施設見学ツアーの開催など、文芸学科をもっともっと知つていただく絶好のチャンスですので、ぜひぜひ会場に足を運んでください。震災チャリティー古書販売も開催。心よりお待ちしています！



キャンパスへ行こう！

演劇学科を知つてもらうためにガイダンスや模擬授業、公開講座を開催致します。普段体験することが出来ない実技や、それぞれのコースの授業内容を実際に体験してみましょう。



【ガイダンス系企画】

- 演劇学科を知ろう！
10:00～12:00・13:20～14:40より各30分
担当教員：千早正美（教授）／北棟2F中ホール
- 演技コースを知ろう！
10:40～13:10・14:00～15:20より各30分
担当教員：藤崎周平（教授）／北棟2F中ホール
- 進学相談コーナー
10:00～16:00（最終受付15:30）／北棟1F第5実習室
- 在学生による何でも相談コーナー
10:00～16:00（最終受付15:30）／北棟1F第5実習室
- 演劇学科情報発信コーナー
10:00～16:00／北棟1F合同研究室

【模擬授業企画】

- 模擬授業「演技を体験しよう！」
10:40～11:30・14:40～14:00より各90分
担当教員：穴澤万里子（准教授）・片岡佐知子（講師）
北棟BF 第1実習室 第2実習室
- 模擬授業「洋舞を体験しよう！」
10:40～12:40・14:40より各90分
担当教員：松永雅彦（講師）・加藤みや子（講師）
堀登（講師）
北棟中2F 第6実習室



新入生歓迎行事や進学フェアの進学相談コーナーで、受験生の皆さんからよく受ける質問。「放送学科ではどんなことを学べるのですか？」「私は将来〇〇〇〇になりたいのですが、そのための授業は具体的にどんな内容ですか？」

非常に答えしにくい。なぜなら、学べることが多岐にわたっているうえ、開講科目を一つ一つ詳しく説明することは専任教員でも不可能だから。そのため、多くの場合、シラバス（各科目的授業計画が記された分厚い冊子）をお見せしながら、「こんな感じですよ」と応えるのがせいぜい…。実は、いつも歯痒く思っています。

でも、オープンキャンパスでは違います。例えば、模擬授業。「脚本を書くということ」「アナウンスの基礎」「映像技術」「CMの発想とは…？」「オーディオドラマの魅力について」「映像作品を作るということ」「文章講座～作文の書き方」といったラインナップを用意し、実際にその分野の講義や実習を担当している専任教員が“放送”の世界へといざいます。さらに、「ラジオスタジオデモンストレーション」と「テレビスタジオ見学ツアー」も用意しています。フルデジタル対応の最新鋭設備や機材を実際に使いこなしているのは学生たちですから、つまりは、入学後の皆さんです。実習授業で臨むこととなる現場の空気に触ながら、そこで番組制作を学んでいるご自分をイメージしてみてください。

実は、企画が盛り沢山すぎて、すべてに参加するのは不可能です。なので、タイムテーブルとにらめっこしながら、上手にご移動ください。

それから、「放送学科ガイダンス」では、特色あるカリキュラムの紹介や入試に関するエントセトラ、卒業後の進路など、受験生の皆さんに知りたいはずの内容を凝縮してお届けします。さらに、専任教員が個別に応対する「進学相談コーナー」に加え、「在学生による進学相談コーナー」も設けました。何なりと遠慮なく質問をぶつけてください。

オープンキャンパスは、きっと皆さんと放送学科との素晴らしい出会いの場になるはずです。学科スタッフ全員集合で、お待ちしています。_____ [放送学科准教授 金 龍郎]



未来へと続く今

智田邦徳

○音楽学科 平成4年卒



在 校生の皆さん、はじめまして！私は岩手県盛岡市に住んでいる音楽療法士の智田邦徳といいます。卒業してから二十年近く経過しましたが、江古田に通っていた日々はつい最近のことのように思い出します。

音楽療法士という名称を知らない人も多いと思いますが、私も大学の授業を受けるまでいったいどんな仕事をするのか想像もつきませんでした。音楽療法の授業は話の内容が難しくて大変でしたが、時々ビデオで映し出される音楽療法の現場の映像や、実際に使われている手法を学生が疑似体験できるワークショップなどを通して、魅力にひかれていました。それまで自分の表現のために歌を一生懸命頑張っていた私にとって、音楽を人の役に立つよう活用するという考え方とはとても新鮮でした。

地元に戻ってから私は精神科の病院や老人ホーム、知的障がいを持った人々の施設で音楽療法の仕事を始め、次第に岩手県内のあちこちで仕事のチャンスをもらうようになりました。場所や対象者は様々ですが、目の前にいる人の気持ちを考えて、相手の表現の手助けになるよう自分の持っている技術や感性をフル活用するという基本姿勢はどこでも共通しています。

現在、私は東日本大震災で大きな被害をうけた三陸沿岸に、ボランティアの音楽療法士として毎週訪問しています。現地では地震と津波によって大切な人やもの、想い出を奪われた人々が、とても不自由な生活を強いられている状況です。いつか時がたって人の暮らしむきが良くなり、この大惨事の記憶が世間から消えていても、被災地に住む人の心の傷はずっと残るでしょう。私はそんな彼らに音楽を届けるため、これからも活動を続けていこうと思っています。私のこのような考え方や行動の基盤を作ってくれたのは、大学での四年間で出会った人々や場所や多くの芸術作品です。

在校生の皆さん、今は目の前にある多くを貪欲に吸収して、多くの体験を積んでください。そうやって多くのカードを揃えた後は、それを使いこなす知恵と技術を社会で学んでください。日大芸術学部で学んでいる皆さんの輝かしい未来とこれからの活躍を、心から期待しています。

無題のコミュニケーション

青木敬士 ○文芸学科 准教授



海 外派遣研究員として日本を離れていた2010年4月から翌年3月までの一年間、僕を母国に繋いでいたのはtwitterだった。そしてサンフランシスコで出会った、やはり僕と同様アメリカに渡ってきた様々な国籍の人たちも、安いホステルの貧弱な無線LANの有効範囲を探し当てては、ロビーや階段の途中に座り込んでノートパソコンを開き、Skype通話をしたり、Facebookに夢中で書き込みをしていた。貧乏バックパッカーたちの巣窟であるホステルでも、もはやこんな光景は当たり前になっている。日本人かな？と思われる顔つきのアジア人がいて、ちらりと見える画面がオレンジ色なら、ほぼ間違なく日本人だ。mixiをやってる……というより、知ってるのなんて世界中で日本人だけだから、あのオレンジ色のヘッダは日本人だけにアイデンティティをアピールする暗号となって、異国の地で孤独な灯を灯している。もともとmixiには、誰かが自分のページを訪ねてくれた「足あと」をリアルタイムで知らてくれる機能があった。(2011年6月現在「足あと」機能はまとめて通知されるように弱体化させられている) もはや世界標準のSNSなのだなあ、とアメリカで実感させられたFacebookだと、日記の「いいね！」ボタンを能動的にクリックしなければ誰が読みに来てくれたのか分からぬ。しかしmixiの「足あと」は、そのページを開いただけで、文字通り「踏んだ」ことになり、相手に「足あと」が知られてしまうのだ。僕はこの「足あと」がとても嫌いで、mixiに登録こそすれ活用は敬遠していた。公開しているものに土足で踏み込むのはネットの常態だが、そこに「足あと」という概念を持ち込むことによって、現実以上に人間関係のわざわざを引き寄せてしまうような感じがしたからだ。実際、mixi中毒者は自分の日記に友人の「足あと」があるのにコメントのレスがないと、相手が冷たいと憤慨したり、自分の日記がつまらないのかと落胆したり、ああでもないこうでもないと、分かるはずもない相手の心を推し量ろうとしてしまう。そして、同じ濃さのかかわりをこちらにも求めてくる。この手のmixiの重さが嫌だった。そんな僕だけがtwitterだけは不思議と続いている。なぜだろう？きっとタイトルづけがいらないから気楽なんじゃないだろうか？ 日記に題名をつけなければ、と思ったとたんに、ほんのちょっとだけ自分の中で、書くことが「作品」の性質を帯び始める。そして筆がつまずく。ブログの場合なんかがそうだ。ここを軽々とクリアできるtwitterのつぶやきは、僕にとって日本でも異国でも変わらない鳥のさえずりと同様心地よい。だが、逆に言えば、このつぶやきの集合体は決して「作品」とは言えない。言葉を作品として紡ぐため、孤独の純度を高めるには、まず回線を切ることから始めなくてはいけないようだ。

アジア、更に世界を視野に

范 旅 ○演劇学科 准教授



写真：田中里実

舞

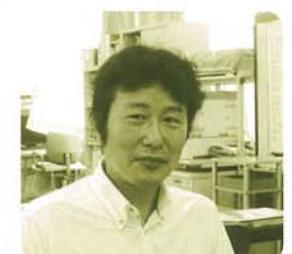
踊家を志した私は中国国立北京舞蹈学院を卒業後、故郷を離れ日本に渡り、日本の古典舞踊から西洋のクラシック、そしてモダンダンスまで学べる日本大学芸術学部を選択しました。現代舞踊の研究と実践を深めるため、大学院舞台芸術専攻に進学し、修了後、学部の専任職員に就くチャンスに恵まれ、学部の仕事の一方で、日本での研究・創作活動を続けるチャンスにも恵まれました。そして現在、洋舞コース担当という、身に余る立場を授かり、創作の現場で学生と共に汗を流す日々を過ごしています。中国から来た私は、日本の文化に接して興味深く思い、「兄弟」のような親しみを感じた訳ですが、一般的に、日本人は外国との共通性を見つけると安心するようです。しかし共通性よりも「違う」のほうが重要ではないかと私は思います。同じアジア人でも国や民族や地域により、実に多様な民俗習慣が保有されています。例えば、日本人特有の奥ゆかしさや思いやりにしても、それが伝わらなければ何にもなりません。相互の違いを尊重・理解し、認めることが大切です。どの国の民族も、文化も、独特の魅力と面白さをもっています。私たちは芸術にとって栄養になることなら、幾らでも貪欲に取り入れます。大事なことは、否定することではなく吸収すること。知らないでいい知識などありません。哲学や歴史や宗教などはもちろん、文化に関わる問題はすべて芸術に関係があります。そうした異文化の理解を提供するような教育環境は、文化や芸術の発展にとって大変有効な方策の一つであると私は思います。

そのため、私が洋舞コース担当として関わってから約10年間、生徒個々の感性を磨きつつ、様々なダンススタイルを吸収してもらえるよう心がけて授業に臨んでいます。さらに海外、特に中国や韓国などアジアの芸術大学や劇団との交流にも尽力しています。一昨年には、洋舞、日舞コースの学生とともに中国を訪れ、現地の学校でワークショップと作品上演を行い、それぞれの感性をぶつける、一步進んだ形の交流が出来ました。私自身がその刺激を受けたのはもちろん、学生も同じく良い刺激を受けたようです。こういった交流の感動や経験を、もっと多くの学生に伝えいくこともまた、私の役目もしくは宿命のひとつだと思っています。そして数年前から、「東洋舞踊」というジャンルの授業も担当し、私の基礎となった中国舞踊を始め、武術や民俗芸能の要素を活かし、更に西洋舞踊のエッセンスを加えた、新しい舞踊への試みに挑戦しています。

今、世界では、現代文明の中でも、最も激しい変革の時代を迎えています。芸術の領域においても、急激な多様化現象により価値観の変動が起こり続けています。世界の人々が共感する説得力のあるものでなければ意味がないでしょう。百年ほど前の万国博覧会の時代のように、物珍しさだけで終わるのではなく、東洋も西洋も、そして日本も中国も、もちろんすべての民族や文化を含め、お互いに刺激し合い、それぞれが磨き上げたものを発信することこそ、21世紀においての芸術文化の発展に繋がるでしょう。心の豊かさと教育環境の広さが、世界を開く力になると思います。

意識して何かを行うということ

池田武司 ○所沢校舎 教務課長



自

分にとって意識して行っていること。それは歩くということ。意識してと言っても、勿論歩いてる間ずっと意識して歩いている訳ではない。今から歩くんだと意識してから歩き出すということ。この世に生を受け、初めて立ち、初めて歩いた時から何十年と歩くという行動を行ってきた。何も意識せず考えずに歩くという行動を。でも、意識してから歩くという行動を始めたのは約3年前から。昔から歩く事自体が苦ではなかった。運動という事を全くやっていなかったので、健康のため、できるだけ歩ける時は歩くことにした。

何事も長く続かない私だが、これだけは続いている。当然長く続いていると、だんだん歩くコースもパターン化してしまう。それでも続けられる理由。それは歳もとったせいか、ネオン(勿論夜景である)も好きだが、自然の移り変わりに季節感を感じたり、新たな発見で心が和むからだろう。例えば、春、妻と何気なく通った道で見つけた綺麗な一本の桜の樹。二人のお気に入りになってしまった。次の年を楽しみに、桜の花が散った後もその樹を見るとなぜか安心する。また、今まで通った事がない裏道にふらっと入り、その道端に咲いた名もない花を見つけた時、なぜかふと自分の心がほほ笑んでいる。

何か話が逸れてしまったが、逸れついでにだが、私は昨年一年間で1,060.62キロ歩いた(勿論、意識して歩いた分のみである)。その距離は、京都を往復(1,027.2キロ)しても余る距離だ。結果としてそれだけの距離を意識して歩いたのだが、表向きの効果は残念ながら、体力が付いたとも痩せたとも思えない。無論そんな効果はどうだっていい。目に見える効果だけが重要ではなく、自分だけの自信、自己満足。それが大切だと思う。自分以外には判らないけど、自己満足は自信につながる。

私が言いたい事、伝えたい事。それは物事を何気なく行うのではなく、意識して行うということ。学生の皆さんにおいては、一つの講義でも趣味でもスポーツでも何でもいい。冒頭にも記したが、一つの行動をずっと意識して行うこととは不可能。でも、一つだけでも意識して、今からやろうと思ってから行動してみませんか。自己満足。大切ですよ。

さてと、今日は休日。何年か前に父の日に家族からプレゼントされた高級？万歩計と共に今から歩きに行こうとするか。勿論意識して。



第5回日藝賞記念講演会が大盛況!!!

本年で5回目を迎えた『日藝賞』。今年は美術学科卒業で「名探偵コナン」をはじめとする人気漫画家の青山剛昌氏、そして文芸学科卒業で第94回直木賞作家の林真理子氏を江古田に迎えた。最前線で活躍する先輩の登場に講演会場は初夏の暑さを超える熱気に包まれた。

6月13日の林氏の講演会は、「私の仕事から」という演目で実施された。日藝生時代の自身の苦労話や自身の生活から収集する作品の題材集めなどをコミカルに語ると、会場は笑いの渦に。31歳で直木賞を受賞してから

今日に至るまでの道のりを振り返る中で、心身ともに健康であること、性格が意地悪であること、たくましい妄想力を持っていること、書くことに陶酔できること、の4点を作家に向く条件として挙げた。多くの文学賞の審査員を務める林氏から日藝出身の若手作家の登場を望まれると、会場の学生たちの表情も希望に満ちたものとなっていた。

6月24日に実施された青山氏の講演会は、青山氏が学生時代に所属していた「熱血漫画根性会」の先輩である阿部ゆたか氏や恩師の一人である美術学科の岩野教授、現在顧問を務める青木准教授と現役生2名を交えた座談会形式で実施された。会場には予想をはるかに上回る学生が訪れ、青山氏が会場に登場すると、広い大ホールも窮屈に感じるほど歓声が沸いた。美術教師になるつもりで入学した日藝での話や仕事の辛さは一日3時間しか睡眠時間が取れないこと等、普段聞くことのできない青山氏のエピソードに、感嘆の声があがった。客席の学生からの質問では、「名探偵コナン」に関する質問が特に多く、質問を行う学生の瞳の輝きはまさに「見た目は大人、心は子供」であった。講演の終わりに質問された「青山氏にとって芸術学部とは」については、「日藝に入らなければ漫画家になっていたいなかった、だから日藝は漫画家の原点」と熱く語った。講演終了後、青山氏の希望で熱血漫画根性会の部室への訪問が行われた。多忙なスケジュールの中ではあったが、学生との交流は非常に盛り上がり、青山氏も満面の笑みを浮かべ、母校でのひと時を満喫していた。

こうして、第5回日藝賞記念講演会は幕を閉じた。
毎年受賞者の先輩達が共通して語ること。それは「日藝で過ごした日々が、現在の自身の原点である」ということ。第6回日藝賞ではどんな先輩からその台詞を聞けるか楽しみである。そして講演会に参加する学生の中から、未来の日藝賞受賞者が登場する日もそう遠くないかもしれません。

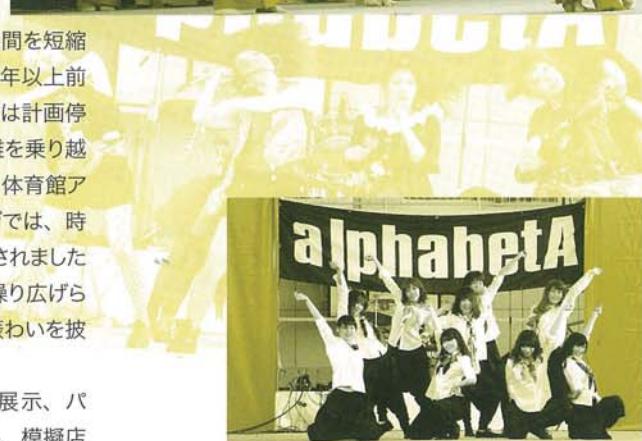


チャンスの神様

Rocky, do you believe that America is the land of opportunity? (ロッキー、きみはアメリカがチャンスの国だということを信じるか?) 映画「ロッキー」での有名な台詞です。プロモーターからこの言葉を投げ掛けられたチンピラにも成りきれないボクサーは、チャンピオンとのタイトルマッチという機会を活かし挑戦する決意を固めます。できる限りの努力を尽くし果敢にチャレンジすることの大切さ、困難に立ち向かうことへの尊さに心を打たれます。

本年度の新入生歓迎行事は、東日本大震災の影響により中止も検討されましたが、在学生の元気を新入生に届けようという思いを胸に5月21日(土)に晴天の所沢キャンパスで開催され、節電等を念頭に開催時間を短縮したにもかかわらず、大勢の来場者に恵まれました。半年以上前から準備をしていた実行委員会、企画団体の学生たちは計画停電や入校制限、企画の変更を迫られるなど様々な困難を乗り越えて準備を行い、本番当日を迎えることができました。体育馆アリーナ、学生食堂、11番教室に設けられた各ステージでは、時間短縮により多くの企画でやむを得ず公演内容が変更されましたが、その分凝縮された、密度の濃いパフォーマンスが繰り広げられました。その結果として、例年以上の盛り上がり、賑わいを披露してくれました。

この行事は、新入生にとって初めて先輩たちの作品展示、パフォーマンス、クラブやサークル活動の催し物を体験し、模擬店屋台までも楽しむことができる



大きなイベント。木々の緑に彩られた広大なキャンパス内では学科の枠を超えた活動を目の当たりにできる

など、随所に発揮される日芸らしさを体感できます。新入生たちは、この場で体験した作品や創作に刺激を感じ取り、これから始まる創作活動への期待が大いに高まります。それと同時に、星の数ほど、払いのけるほどある選択肢のなかからなぜ日芸を選んだのかを強く実感できます。在学生も新入生たちのビビッドな反応を受け止め、新たなヒントを得て、さらなる創作意欲を刺激されたことでしょう。

若きクリエイターにとって、発表する場があり、他者の目に触れてもらう機会が増えるということは、それだけで意味のあることであったと改めて認識させられました。実際、この新入生歓迎行事の企画数は、10年前は50余りでしたが、年を追う毎に二次曲線を描きながら増え続け、本年度は合計96企画を数えるほどになりました。発表・表現の機会を求めるニーズは文字通り上昇し続けており、どのように提供してそれをサポートしていくかが課題ですが、日芸にはチャンスが溢れています。行事を通して得たモチベーション、気持ちの高揚、挑戦への意欲、それらを持続してくれることがささやかな願いです。どうかこのまま、二次曲線で。

所沢校舎学生課 松田 大



8つのアート&ニュース

写真学科

◎新任教員

4月から、ゼミナールに写真家・平間至先生、読売新聞社・池田正一先生、写真印刷に(社)日本印刷技術協会・郡司秀明先生を講師としてお迎えしました。

◎東レ(株)・東京モード学園との産学連携プロジェクト

石崎由理さん、藤川舞子さん(4年)が撮影した写真を素材にモード学園生のデザインコンペを経た、2011年東レ水着キャンペーンポスター3種が完成し、販売店頭に掲出されます。

◎APAアワード2011受賞者に卒業生

(社)日本広告写真協会公募展にて、金丸重儀賞「もろびとこぞりて」(全5枚)のまゆみ瑠衣(黒瀬まゆみ)さん、奨励賞「はばたく」(全5枚)の井上綾乃さん(ともに平成19年度卒業生)が受賞しました。

◎平成22年度卒業制作作品展開催中

平成22年度の卒業制作の中から選ばれた9名の優秀作品が、江古田校舎東棟写真ギャラリーで5月から12月にかけて順次展示されます。ぜひお立ち寄りください。

◎東日本大震災復興応援関連

高校写真部による東日本大震災復興応援プロジェクト in 「うほく元気祭り」(5月28日・29日)に協力し、ボランティア参加しました。

◎NHK教育テレビにて湿板写真の再現指導

6月21日放送「直伝 和の極意: 大野弁吉: 箱型写真機の極意」にて、田中里実助教が湿板写真の再現指導をしました。再現指導のもと、生徒役のTOKIO・山口達也さんが当時(幕末)の写真術「湿板写真」を実際に体験する内容です。

◎写真甲子園2011及び東川フォトフェスティベント

本年も7月26日~29日の北海道東川町で開催される「第18回全国高等学校写真選手権大会(写真甲子園2011)」及び7月30日・31日開催の「東川フォトフェスタ写真館(虹)」に、写真学科教員がサポート及びライティング指導として参 加します。

◎夏休みワークショップなど

夏休みに開催される以下のワークショップや研修会、写真学科の教員・スタッフが指導を行います。

○第11回高校生のためのワークショップ
デジタル写真クラス及び銀塩写真(初級、中級・上級クラス)
7月23日、24日 江古田校舎

○埼玉県高等学校文化連盟写真専門部「平成23年度第2回技術講習会」
8月8日 所沢校舎

○茨城県高等学校文化連盟写真部会「平成23年度撮影研修会」
8月9日 茨城県笠間芸術の森(笠間市)

○茨城県高等学校文化連盟写真部会「平成23年度指導者研究会議(WS)」
8月20日、21日 江古田校舎

○埼玉県立芸術総合高等学校 学外学修
8月22日~25日 江古田校舎

◎秋のオリジナルプリント展開催

オリジナルプリント展「THE FAR EAST—極東の島国より—

我が国新聞写真的起源」が、10月25日から11月11日まで江古田校舎芸術資料館において開催されます。現代の報道写真の始まりでもある貴重な写真コレクション展です。

映画学科

○社団法人日本映画テレビ技術協会「第29回そつせい祭」において、映画学科平成22年度卒業制作作品「ポーダー」がグランプリを受賞しました。

○社団法人日本ポストプロダクション協会「第15回 JPPA AWARDS 2011 学生の部・音響技術部門(カテゴリーI:ドラマ)」で映画学科平成22年度卒業制作作品『タイムカプセル』(中島裕介さん)がゴールド賞を受賞しました。

同部門で映画学科平成22年度卒業制作作品『ポーダー』(清水里子さん)がシルバー賞を受賞しました。

○平成22年度卒業制作(監督・撮影・録音・演技)は、16mmフィルム作品10本、35mm劇場用フィルム作品1本、ビデオ作品19本の計30本が制作されました。これらの作品は、「映画演出III」、『映画技術III』の作品と併せて「Focus in 2011」で6月26日から7月3日まで上映されました。

○「映画演出III」、「映画技術III」課題作品、「映像III」課題制作作品、「卒業計画」映像制作作品、「卒業制作」作品が、J:COMMUNITYのJ:COMチャンネルにて「日暮アワー」として放映されます。

美術学科

◎生み出すチカラ 日藝美術学科出身者による版画展

6月10日~7月31日 星と森の詩美術館(十日町市)

◎N+N展 生命を見つめる

6月23日~7月3日 練馬区立美術館

シンポジウム: 6月25日、ワークショップ: 7月3日

◎第4回 柳瀬荘アート・教育プロジェクト

絵画・版画・彫刻と卒業生による作品展

I期: 10月6日~30日(木~日開館)

II期: 11月3日~27日(木~日開館)

◎kurakake・kuraoka sculpture exhibition

鞍掛純一准教授と倉岡良太さん(大学院造形芸術専攻1年)による作品展

6月25日~7月10日 Aoビル1f(青山)

◎ 笹井祐子准教授 展覧会

○Pintura en Ceramica

7月12日~30日 Gallery ARK

○佐藤杏子・笹井祐子2人展

9月29日~10月8日 Gallery ARK

○個展(ギャラリー1分の1、gallery福果 同時開催)

11月1日~6日 ギャラリー1分の1

11月1日~12日 gallery福果

◎富井大裕助教 展覧会

○影刻林間学校「アースバウンド」

6月4日~11月6日 メルシャン軽井沢美術館

○横浜トリエンナーレ2011

「OUR MAGIC HOUR—世界はどこまで知ることができますか?」

8月6日~11月6日 横浜美術館、日本郵船海岸通仓库(Bank Art Studio NYK)

○所沢ビエンナーレ美術展「引込線」

8月27日~9月18日 所沢市生涯学習推進センター、第2給食センター跡

○「呼びとめられたものの光」

9月17日~2012年2月19日 名古屋ボストン美術館

音楽学科

◎演奏会のお知らせ

○第40回サマーコンサート

7月26日~28日 江古田校舎小ホール

○第104回定期演奏会

10月14日 練馬文化センター小ホール

○第47回室内楽の夕べ

10月17日 練馬文化センター小ホール

○第105回定期演奏会

10月24日 練馬文化センター大ホール

○第23回ウンドオーケストラ定期演奏会

11月22日 練馬文化センター大ホール

○第39回ファカルティコンサート

11月26日 江古田校舎小ホール

○第40回ピアノコンサート

11月28日 練馬文化センター小ホール

○第32回新作室内楽の会

12月16日 江古田校舎小ホール

Switch 2011 情報音楽コース
学生と教員によるインスレーションとコンサート作品の制作発表



芸術学科

◎第10回 江古田文学賞原稿募集

江古田文学会では、清新な小説と文芸評論を募集しています。大学の枠を超えた一般の方も対象に含めた文学賞ですので、新しい文学を志す方の挑戦をお待ちしています。

○応募資格: 不問

○募集内容: 小説・文芸評論(清新さをもつもの)

○枚数: 50枚~100枚(400字詰原稿用紙換算)

○発表: 「江古田文学」78号掲載予定

○賞金: 20万円

○締切: 8月31日

○応募方法: 表紙をつけ、タイトル、住所、氏名、年齢、職業(本学生の場合は学籍番号も)、電話番号、400字換算枚数を明記。エンネームの場合は本名も併記すること。原稿は折らずに、右肩をクリップでとめるかパンチ穴を紐締じにすること(糊づけ、ホチキ留め不可)。全ページに通しナンバーをはっきりとふること。ワープロ原稿はA4用紙(横置き)に縦書き。30字×30~40行で読みやすく印刷する。感熱紙は不可。手書き原稿の場合は400字詰め原稿用紙にペン書き。鉛筆原稿は不可。

○原稿送付先: 〒176-8525 東京都練馬区旭丘2-42-1
日本大学芸術学部文芸学科内「江古田文学」編集部
江古田文学賞係

○「同人誌展『九州文学』と『こをろ』～福岡の文学者たち～」を開催

九州で創刊された同人誌『九州文学』と『こをろ』を中心とした展覧会が江古田校舎芸術資料館において、6月28日から7月22日まで開催されます。充実した資料展示になっておりますのでぜひ足をお運びください。

○開館時間: 9:30~16:30(土曜は正午まで)

○休館日: 日曜・祝日(7月18日は開館)

○観覧料: 無料

○主催: 芸術資料館、文芸学科

演劇学科

学内外の観客を迎える江古田校舎中ホールの大階段。一段一段上り下りすると夢の扉が開きます。後期も多くの方々の御来館をお待ちしております。実習発表や卒業制作が始まります。公演日程は下記のとおりです。

○舞台総合実習ⅢA【演劇】『お気に召すまま』

作: W.シェイクスピア 構成・演出: 加藤直

7月1日~3日 江古田校舎北棟中ホール

○舞台総合実習ⅢC【日舞】『大和楽 風流洛中洛外』

作: 萩原穂村 編: 高橋正典 指導担当: 三浦泰司

7月2日~4日 江古田校舎北棟中ホール

○創作『羅れ!わが命~その一歩、ここに踊りだせ!』

作: 神谷浩介 指導担当: 有川泰史

7月3日~5日 江古田校舎北棟中ホール

○舞台総合実習ⅢD【洋劇】『恋するアリス』

作: ディズニー・ストーリーズ 構成・演出: 鈴木雅之 指導担当: 石井政樹

7月4日~6日 江古田校舎北棟中ホール

○創作『恋するアリス』

作: ディズニー・ストーリーズ 構成・演出: 鈴木雅之 指導担当: 石井政樹

7月5日~7日 江古田校舎北棟中ホール

○創作『恋するアリス』

作: ディズニー・ストーリーズ 構成・演出: 鈴木雅之 指導担当: 石井政樹

7月6日~8日 江古田校舎北棟中ホール

○創作『恋するアリス』

作: ディズニー・ストーリーズ 構成・演出: 鈴木雅之 指導担当: 石井政樹

7月7日~9日 江古田校舎北棟中ホール

○創作『恋するアリス』

作: ディズニー・ストーリーズ 構成・演出: 鈴木雅之 指導担当: 石井政樹

7月8日~10日 江古田校舎北棟中ホール

○創作『恋するアリス』

作: ディズニー・ストーリーズ 構成・演出: 鈴木雅之 指導担当: 石井政樹

7月9日~11日 江古田校舎北棟中ホール

○創作『恋するアリス』

作: ディズニー・ストーリーズ 構成・演出: 鈴木雅之 指導担当: 石井政樹